

六 四季、日に新たなれ

もちろん蝶は、そよ風に舞い花々をめぐるのが好きだ。そういう種類の話をこの雑記帳に書きつづる生活こそ望みだ。そのためにこの海辺の生家に帰って来たのだから。

十数年も前に帰郷計画を立てると、少しずつ準備をした。小屋を解体してできた海側の狭い空き地に、四季に花を愛でようと欲張って多くの花木を手ずから植えた。それが空想だったことはまもなく悟らされた。内海の奥とはいえ時々潮風が見舞う。定家卿に抗して浦の苦屋に花と紅葉を咲かせようというもくろみはあえなく潰えた。桜は冬の北西風のせいで南側の枝だけが成長している。楓はハナミズキに取って代わられた。手負いになったつつじの隊列のあとには横が来た。こうして木々の潮風に対する耐性を学習してみると、葉を落としてやり過ごす落葉樹の方に持ちこたえるものが多い。家内の管轄する背の低い草花も強い。自然への適応の仕方は多様なのだ。野性を残すバラが強くいちばん華やかに咲くのはうれしい発見だった。今では自作の小庭はなんとか形を成して、対岸の山から月が上るときなど得難い観月の場となっている。

家から百メートルあまり離れたところに畑がある。ただし、たくさん石ころの混じった

痩せ土地である。しかも水の便がない。畑のそばは鰯の煮干しを干したりした場所で、両親がすでに栗・枇杷・梨・李を植えていて、一本ずつしかない梨と李は実をつけないまま大きくなっていた。帰郷前に、まずレモン、次に梨とリンゴを二本ずつ、さらに李・イチジク・ブドウを足した。帰郷すると、果樹畑に続く水産加工場を解体して平地にした。表面は土よりも瓦礫の方が多いくらいだが、そこを雑草の生えるにまかせたくなかったのも、また果樹を植えた。蝶の思いつきは、三・四本ずつ数年かけて植えるという行き当たりばったり。結局、柑橘類五本・柿二本・サクランボ・桃・グミ・ブルーベリーなどが加わり、両親の植えた分を除いて十二種、二十数本。少しの野菜と幾種類もの果物を収穫することを夢見て、いなか暮らしが始まった。

それが苦勞のはじまりであった。母の野菜作りを見ていたのに実際にやったことはないから、隣の人をやきもきするほど、まったくの初心者作業である。土を耕し、肥料を入れて畝をつくり……。春先から五月までに三度ぐらいいは強い風が野菜の苗を傷めつけるのはまだよい。水の便のない乾燥した土地が厄介なことをすぐに知った。三年経験してやっと、この地方が雨の少ないところだということを認識した。梅雨明けから四十日あまり、雨が降るのは僥倖と思わなければならない。五月も同様で二十日以上雨が降らない。これらの

日々、家から運んで水をやるのが日課になった。不在のあいだに何本か枯らしているのが、中庭と海側の小庭の木々にも水やりが必要だ。果樹は、ホームセンターで買ってきた苗木だから、ひと夏を越すまで水を切らせない。それを三年に分けて植えたのはまずいやり方だったということをあとになって気づく。その上、離れたところに一か所耕作放棄地がある。その雑草も刈り取らなければならない。いずれも、汗をかくとすぐあせもができる体質にはたやすくない作業である。

こうして、故郷に隠退するという楽しげな夢から、まず忍耐を教えられた。日本の気候では抜いても刈り取っても雑草はすぐに成長すること、そのとき競争があつて別の種類の草も生えてくること、過保護の習性を植えつけられた果菜の実りを授かることが易しくなっていくことなど、身をもつて学習した。その苦勞の中で四季のめぐりを感じ得る。自然と人間のことを少し余計に識つたのだろうか。これが時に人のあこがれる「晴耕雨読」の晴耕ということなのだ。楽なことではない。しかし、土に親しむ晴耕は人を自然に溶けこませて考え深くするだけではなく、実りを授けてくれて楽しみをもたらす。それに、構想し期待し修正する三・四年の年月は、精神を鍛えてくれて柔軟性が増したよう。欲張つて多品種を育てようとしていることは、先ほどのリストで明らかだが、元からあつた枇杷と栗に加えて自分で植えた果樹が実をつけ始めた。満身創痍のリングゴが今年初めて実を熟すかもしれ

ない。メロンと西瓜も生った。おや、わずかに成功したばかりなのにもう自慢の気が出た。抑えていても収穫の喜びは、今後もこの雑記帳に表われるのだろう。雨読の方はここでは実は晴読のことが多いが、そちらも雑記のはしほしに顔を出している。

この隠退の生活の師は第一に五柳先生陶淵明である。何年も前からふと口をついて出た言葉を詩句にしようと試みて、ひそかに号を付けている。自分のことを蝶と呼んでいるのは、田園に帰る辞表を書いた頃に号を海蝶としたからだ。帰ってからのわたしの南山は、自作の庭の先の内海の向こうの山々である。そこから月も上るから本当は東山だ。石ころと瓦礫だらけの果菜園は「荒地」と呼ぶことにした。残念ながら才能に欠けた蝶に詩の生まれることのない荒地である。第二の師はM・モンテーニュ先生。蝶の意図では、いなか暮らしに楽しみを見出し、また日々の生活を秩序あるものにしようと心がけている。ただ、生来の拙さのために、その生活を築くのにとてもたしているけれども。この師が詩を書くことよりも味わうことの方がむつかしいと言っているので、弟子はやさしい方を試みているわけである。日本に師を求めるとすれば、自由を追求した良寛禅師である。しかしながら、禅師のように詩句を書きつけてみるものの、あの切りつめた厳しい生活からほど遠いので、透徹から自在さに抜けた境地をただ仰ぎ見ることしかできない。三師にあこがれな

がら海辺の蝶の生活が続いている。この作務は実りをもたらすだろうか。

先日の昼食時、テレビニュースがうつとういことを報道していたから、「ターシャからの伝言」という番組に切り替えたら、すぐにその魅力に引きこまれた。わたしは知らなかったが、家内が絵本作家だと教えてくれたので、孫に読んで聞かせた『コーギヴィルの村祭り』を思い出した。田園の暮らしの賛歌を彩り豊かに描いた絵本だった。次週にもあった番組は、ターシャ・テューダーという人が歩んだ人生に触れながら、住居と手ずからつくり出した美しい庭に、花々の咲き誇る春から長い冬までの四季がめぐる映像を映し出した。十五歳から名門の家を出て絵と農業の道へ入った人は、五十六歳だった一九七二年以来そこで生活したという。息子が前世紀の農家風に建てた住宅は、台所に便利な設備や道具もほとんどない。そこに独りで住み、畑を耕し、草花や果樹を育てて三十数年間自然と対話したのだ。映像はその最晩年の二〇〇〇年代に撮られたもの。九十余歳の貴婦人の言葉は、単純でとても貴重な意味に満ちている。言葉に偽りのないことは、それほど長い年月の暮らしぶりと瞳を輝かせての物静かな語りがよく証言している。そして喜びのあふれる絵とが、モンテーニュが求めたように、まさしく「生き方に秩序と平静をかちとり」、「それ自身が目的である生を」楽しみながらよく生きたことを示している。ここに「立派

に生きた偉大な光輝ある傑作」がいる。わたしはもう一人の師を見つけた。

海辺の蝶は、これらの師の生活に学ぼうとする。知恵ある言葉を味わい、その死生観にまで達したいものだ。しかし、どんな教えも直接伝授されることはなく、自分のやり方で実践しながら会得するしかない。記憶力のない蝶は、陶淵明や良寛の詩と和歌を暗誦することも、モンテーニユの数多い意味深い言葉を復唱することもむづかしい。代わりに、「まことに日に新たに、日々に新たに、また日に新たなれ」と自分を励ましている。この言葉は年長の友人の年賀状にあった。キリスト教徒の家庭に育ってキエルケゴールをテーマとする人が、『大学』に出る殷の湯王の水盤に刻まれていた言葉を引いたのだ。ちょうど『大学』を読んだわたしは、この年賀状に促されて、毎朝顔を洗うときそれを唱えることにしたのである。もう一つ、身心をよく導くために毎日唱える言葉がある。——身体を感じ、感受を観察し、心を観察し、諸々の事象を観察し、熱心に、よく考えて、念じていて——。